短歌　岩本宗二郎選

入選一席　宮浦　山西光一

徹夜して積みたる石炭二十函吐きても吐きても出づる黒き痰

ローダーの石炭を炭車に積みながら退職のことひそかに話す

蒸しあつき風の吹き来る切羽にて飲む水筒の番茶がうまし

地の底に炭車を押せる我れ等みななほることなき水虫持てり

壁に掛けし坑衣が匂ふ部屋にゐて今日の無事故の日誌をしるす

右肩の痺れを重みに意識してやにの流るゝ坑木かつぐ

入選二席　製作　藤本盛登

熔鉄に焼けたる顔を映しみる鏡のふちに積もる煤煙

どろどろに熔けたる鉄が今吾を導く如く輝きを増す

あかり消す職場に残る熔鉄の匂ひ静かに今日も終りぬ

まんまんと鋳鍋に熔鉄みたしゆく起重機は赤き反射をなせり

ハンマー振る固き掌思ひ切りひろげて眠る昼の休みは

賃金遅払に慣るわれら腕組みて低音にうたふ三鉱労組のうた

入選三席　三川　本村守

先生と呼びて顔寄す少年と見誤られたる吾のはにかみ

家焼けし跡に見てゆく焼け残る夾竹桃の枝は花もつ

清れつな色に望めて白木げ小雨に濡るる校庭に入る

手を挙げて呼ばるる吾子が黒板に答へを書きし確かなる出来

学童がはだしを願う渡り土間参観の母らどろ靴に踏む

飛行機より撒かれしビラに読む毒のどぎつさ既に批判されをり

秀逸　四山　蓮尾蒼馬

青空となりゆく梅雨の雲はやし青桐の花風にゆらぎて

坑口にくさぐさ盛りし花の重くちなしの花疎に匂へり

残り火の七輪借りてナスを焼く妻留守の日の昇坑夫われ

苦力ハットかむりし市長の顔もみゆ炎天下ゆく平和行進

うつむきて汗のしたゝる音をきく発破待つ間の静かなひととき

製作　江上輝廣

強行就労成功したり暁の坑門にたく炎はぜつつ

春昼の光に揺れて本館を埋めたる花の如き鉢巻

ニュースカー上につれ出され来し会社首脳の鍛へられたる態度に対ふ

夕光の中に湧き来るデモの列砂塵の中を吾れは走れり

製品の大方が外註に廻されしスト終りたる職場を掃けり

製作　永松運造

のぼりゆく直線舗道デモ隊の赤旗の波わが後につづく

賃金遅払抗議デモ隊の中に吾れも汗したたらせ坂のぼり行く

会社前広場をうめしデモ隊の「団結頑張ろう」と拳つき上ぐ

牛乳をわけて呑みたる空瓶を明日待つ箱へ子が入れにゆく

三川　中尾種夫

冗談を云ふ余裕なく泥沼を出でし顔して友と石炭掘る

炭界の不況招きて憚からぬ一握の人を強く憎めり

解雇されし怒りに頬を濡らしたる日が蘇へる赤旗持てば

予定せし夏山の旅見送りて企反闘争の推移に備う

製作　北原一男

つゝましき吾が生活のよりどなる賃金遅払のPR飛ぶ

借金を重ね来りし永病みの後に賃金遅払は来ぬ

会社側幹部を囲むデモ隊の万余を越え来て響き極まる

会社前広場を埋めしデモ隊のどよめき上る灼けし陽のもと

佳作

三川　宮崎天馬

砂川基地判決支持する署名簿の救はねばならぬ人混みに入る

納得のいく回答はまだ出でぬ抗議集会投光器点く

連絡のベル確認し炭車捲く危険信号斜坑に響く

三川　上田鉄男

靴裏に滓けしタールの粘る道平和大行進の列行く

抗議デモかけて午後よりソロバンをはじく指先微かにふるう

浴場の湯気は明るき色増しぬ夜勤終えたる人車着くころ

宮浦　永野草平

盛圧の枠のきしみに怖えつつコンベアー回収の作業を急ぐ

硝煙のいまだ揺れる天盤の発破の跡の弛みたしかむ

座り込むピケの芝生に降り注ぐ雨水しみし握り飯食う

四山　鶴田真幸

広島へ続くこの道炎熱の聖なる行進続きつづきて

算盤の珠もうごかぬ梅雨じめり生活の不安日々に増しくる

坑内に汗出しつくし昇坑りきて炎暑のデモの列に加ははる

宮浦　高むく竜生

給料日明日となりたる流し場に米とぐ音の夕べとなりぬ

弁当の蓋ひき合えるゴキカムリ帽燈向くればあたふたと逃ぐる

「給料が上るように」と子の書きし七夕色紙雨に濡れ立つ

港務　松原直吉

炭台車修理工等の手にふれる花間に今年は浜木綿咲けり

警官に抱かるごとしてバスが行く花火の河岸の人押し分けて

提灯を振りて馳けより馳け違い山車引き立つる児等を続べおり

四山　馬場久元

昇坑の拒送鉱夫過ぐるとき一言洩らす声まだ若し

門しめて耐え来し詰所立ち出でて夕べを涼む椅子出しにけり

扉にかけし平和の二文字色あせていま前過ぐる平和行進

製作　宮本英輔

業務要員残してデモの去りゆけば機械の音のみこだます工場

濡れつつも燃ゆる炉焔よ夕されば命の色と見ゆる淋しさ

宮浦　中西長輝

ひと振りまきたる豆の数ほどの学童たはむる僻地学校

本所　木下雲嶺

暮迫る吾が家へ道一ぱいに石ころばかり靴に纏けり

宮浦　山下ますお

風雨のなか鉱夫ら坑口に吸われゆく落葉の吹き入るごとき思ひに

三川　ますだ清次

わが影凍る舗道に描き出しトラックうしろよりライト浴びせぬ

四山　諸永重司

あの宵の悲しき別れ刻みたる柱時計のたしかなる位置

本所　野口次郎

けいれんに苦しむ母にモルヒネを医師がうてば又眠りそむ

宮浦　川口照子

夜勤よりかへれるつまの笑顔見て無事とよろこび朝げかこみぬ

本所　瑞峰

四十度の熱に一夜を耐えぬきし吾子のひたいにほほおしあてつ

祖母逝きて悲しみ知らぬ幼子は人来たりしを喜びて居り

製作　野口一徳

選評

療養短歌や受刑者の歌がその特異性を以て注目されている現歌壇において勤労者の短歌もまたそれらと比肩する分野を占めていることは動かし難い事実である。勤労者の短歌が注目を浴びるようになつてきたのは、旧来の短歌観念から脱脚して現実の厳しさと対決したくましい生活意欲を盛り上げるようになつたことに基因する。そしてこれはまた、高度な思想性へつながる前進姿勢であるから心強い限りである。短歌を風流韻事視するような態度ではもはや現代の生活感情の表白はとうてい不可能であることを自覚しなければならない。

以上の言葉は今回の応募作品についても言える訳で、少数の例外を除いてほとんどが巧拙に拘らず真実な生活に基礎づけられている点に留意したい。つくりものでなく本当の感動を訴えるようになつたことは正しい傾向である。

入選一席の山西君の歌は何よりもその誠実さが心を捉える。短歌ずれしていない短歌である。あくまで真面目に取組んでいる。思いつきの趣向や技巧を凝らしたりしていない所が一見単調なように見えながら落ちついた声調と融合して重厚な風格を示している。

第一首の「吐きても吐きても出づる黒き痰」には深い響きがある第三首は余りに言いつくした感じがする。第四首「なほることなき水虫持てり」が効いている。坑内生活の一つの象徴がある。第五首は抑えが利いている。第六首「重みに意識して」「やにの流るる」等に動かせない実感が滲んでいるどの歌も、感動を沈潜させていることもひとつの特質であろう。二席の藤本君の作品も非常に真面目である。優れた職場詠と言える。まだ生硬な点はあるが真摯な態度で対象をみつめる純粋さは高く評価されていゝ。第一首の緻密な観察は生活環境をよく描き出している。第二首「導く如く輝きを増す」には厳しさがある。第三首、第四首は素直であり、第五首には粉飾のない姿が見える。「思い切りひろげて」が立派な焦点となつている。第六首は「低音にうたう」に感じをこめているが、一、二句の説明脈が動きを鈍くしているようである。三席の木村君の歌には個性がある。技巧派とよばれる作品とおよそ対しよう的なのが木村君の歌である。誠実な人間性がその作品を支えている所に独自の持ち味を滲ませている。未完成の魅力といつたものがある。第一首は良い所を掴んでいる。素朴な人間像が現われている。第二首、第三首はあまい歌に陥り易い素材であるが器用さがないために却つて救われている。第四首には肉親の愛情が率直に詠われていて駆引きのない人柄が窺える。第五首は一徹な正義観を訴え第六首も異質な作風であるが、一般には難解歌と見られる欠陥がある。独立性に乏しいと言えよう。

秀逸蓮尾君の歌には手馴れたところが見える。詩情もあるし快い階調も備えているが主観の燃え上りに乏しいため上りすぎた感じがする。第一首、第二首など鮮明でありこまかい心配りも肯けるが一本強く徹るものに欠けている。俳句的手法に近い客観諷詠風が作者自身の姿をぼかしている。然し現在の勤労短歌に欲しい健康さや明るさを導く意味で蓮尾君の作品に留意したい。江上君の歌には作者の思想乃至は信念というものがはつきり徹つている。勿論それは成長の過程にあるが期待させる所がある。第二首は情景の鮮明な割りに「花の如き鉢巻」のうけとり方に疑問が残る。「春昼の」は遊んでいる。避けたい言葉である。第二首は深い心境が単純化されている第五首は良い狙いであるが三句までの冗漫さがこの一首の流れを阻んでいる点に再考の余地がある。

永松君の歌はまだ粗雑な感じや単調さはあるが正しい傾向を示している。一途な情熱を活かしてゆくことである。第四首が佳い。「わけて呑みたる」「明日待つ箱へ」という繊細な配慮が陰影を与えている。中尾君の作品には独自の体臭という程のものはないが一通り掴んでいる。第二首の狙いは深いが作品としては記述的、抽象的になつているのは惜しい。第三首には切実な盛り上りがある。第四首はもつと具体化したい。北原君の第一首、第二首共同じ素材で、それを夫々の角度からとらえてある点は了解できるが後者の方が身近かな感じがする。ここでも指摘されることは具象性の乏しさから来る弱さであろう。「つつましき吾が生活の」などはもつと実感を伴う表現が欲しい。第四首、第五首にしても一応まとまつているものの心の底から押し上げてくる迫力が足りない。対象と作者との距離が少し遠過ぎるようである。

佳作に廻した作品の中にも宮崎君の歌のきびきびした態度、上田君の巧緻な手法、永野君のピケの歌に見る実感、鶴田君の素朴な生活感情、高むく君の潤いある詩情松原君の多彩な感触、馬場君の柔軟さ等それぞれに心を惹くものがあつた。

他所行きのそえものでなくありのまゝの姿で詠うことが肝要である。現在三池に幾人かのすぐれた素質を持つ人達を擁しているからと言つて満足することは決して許されない。三池の歌人層はもつと広く、もつと厚いものであつていゝ害である。そのためには皆が不断の努力を積み重ねてゆくことが必要である。

俳句　後藤是山選

一等　宮浦　高むく龍生

坑外に天磐はなし秋高し

二等　製作　永松運造

槌うつ手に汗したたらせ貧しかり

三等　四山　馬場久元

一坪の妻の菜園キャベツ巻く

秀逸（五句）

四山　鶴田真幸

灯取虫坑内の詰所の昼餉の灯

四山　蓮尾蒼馬

あがり来し朝の心に金魚みる

製作　北原一男

炎天下運び入れたる鉄匂ふ

四山　那須静峰

スト長し黴の坑衣を洗ひけり

三川　永野定一

坑帽の重さよ汗に髪ちぢれ

佳作（十句）

三川　宮崎天馬

夏痩せの毛脛に夜勤の脚絆巻く

四山　鶴田真幸

天磐の亀裂にひげや五器冠

四山　蓮尾蒼馬

落武者の如く坑出づ暑気中り

製作　藤本盛登

熔鉄の匂ひ激しさ酷暑かな

四山　藤枝銀波

納屋二間奥まで透ける古簾

製作　森口きよ秋

ヒロシマ遠し灼けし大地をしっかと踏む

富山　十郎

妻抱かなブドウに夜の雨至る

火蛾の灯に調印のペン重く持つ

四山　馬場久元

喜雨の中よろこび灯し牛を見に

喜雨の畦踊るが如く人往き来

選後に

応募句のほとんど全部が、各自の生活に根ざしたもので、表現、描写の技巧上の巧拙は別として、どの句を拾いあげてみても、その一句一句の中に、作者の息吹きが感ぜられ、作者の生活感が脈うつている。これは世間流行のきれい事に終始している作句の世界とは一線を劃するに足る別天地を有していると言つていい。

欲を言えば、視野が幾らか狭小におちいつている憾みはある。この点は注意を要すべきであるけれど、然し比較的限られている生活感情を、更に深くふかく掘りさげて行つて、そこから他の追随を許さぬだけの独自の境地が開拓されるとすれば、視野の狭小も必ずしも、とがむべきではないかも知れない。ただ折々句会を開いて、互に同想の類句を戒め合うだけの注意は怠らないようにしたいものである。今度の応募句中にも、類句若しくは類句に近いものが、相当あつた。

次に選句の一、二、三等について言えば、一等の上五、中七は、いつも圧迫されているような坑内生活から開放された時の坑外生活の鼓動の高鳴りが感ぜられる。二段切の強い言い放ち方も、この場合利いている。二等は幾らかたく木的のものを感ぜぬでもないが、然し借りものではなく、作者の実感が脈うつている。上五原句「土の手に」であつたが、それは言葉にも無理があるし、実体の動作をもみせた方がいゝので、「うつ」の二字を添へた。三等は下五の「キャベツ巻く」が活躍していて、日常生活の中の夫婦の欲望が、巻き太るキャベツの葉の一枚一枚の中にこもつている。

秀逸、佳作の中に、同一作者があるのは、他の応募句との比較上やむを得なかつた。この点諒察を乞う次第である

お知らせ

夏季文芸募集に応募された方で、入選者および紙上発表分には賞金（品）がありますので、印鑑をもつて各支部教宣部で受取つて下さい。

なお、例年受取りが非常に遅れる人があり、教宣部で整理がつかず困つていますので、八月中には必ず受取られるようお願いします。

みいけ編集部